

紹介

森本芳樹編

『西欧中世における 都市と農村』

本書は、西欧中世の都市・農村関係に関する共同研究を続けてきた森本芳樹氏を中心とする若手研究者グループが、このテーマに関するヨーロッパの代表的な研究論文を翻訳、編纂したものである。既に雑誌論文において個別的に独、仏、ベルギーにおける研究動向の丹念な紹介をおこない、さらに各人の個別実証研究を論文集として公にすることを予告しているこのグループの精力的な活動に敬意を表したい。本書に収められた各論文の概要を紹介しておこう。

I G・デュビイ(宮松訳)「フランス史における都市的なものと農村的なもの」は、*Histoire de la France urbaine I*, 1980の序論を訳出したものであり、現代都市の危機をふまえた、簡潔なフランス都市文明論をなしている。デュビイによれば、古代以来常に、農村からの人口と財貨の流入を

もたらす政治的、軍事的、宗教的諸力こそ、都市の成立、発展の要因であった。七〇年代より中世社会経済史に関する新しい視点を我物としたデュビイのこの論文は、本書のためにも刺激的序論の役割を十分に果しているといえる。

II M・ミッテラウアー(藤田・森本訳)「古代都市から中世都市へ」は、「農村的周辺地に対する一定の中心機能を備えた定住地」という、ゆるやかな機能的都市概念を用いて、ケルト人のオビドウム、ローマ時代のキヴィタスから中世盛期の都市までのその連続性を強調する。本論文で示された、一一世紀まで「ブルク」は、支配者の防備施設と都市的、市場的機能を結合させた集落を意味し、一二世紀のうちに両要素とその表現が分化するというシュレジンガー説を、全ヨーロッパに敷衍した所論は、ミッテラウアーの別稿 *Herrenburg und Burgstadt: Markt und Stadt im Mittelalter*, 1980 において精緻な展開をみることになる。

III G・デスピイ(平嶋・森本訳)「九一〇世紀の都市と農村」は、九一〇世紀のムーズ地域での都市発展の要因をムーズ

河航行によるフリーセン人の遠隔地商業の中に求めるピレンス、ルソー以来の見解に對し、むしろその農村的後背地の経済的発展と、農村市場の形成にみられる地域的商流通の展開を重視しようとする。このきわめて正当な立論を、プリュム修道院の所領明細帳を用いて実証し得た点に本論文のメリットがある。農村所領史研究の成果が都市史の新しい解釈を生み出す。いわば西欧中世都市・農村関係のダイナミズムをそのまま研究領域に反映させた如きデスピイ論文は、この意味で戦後ベルギー学界を代表する成果のひとつといつてよい。

IV J・シュネーデル(山田訳)「フランス王国におけるフランシーズ文書の起源」は、フランシーズ文書を「君侯や領主が発給し、一つの定住地ないしは定住地群の住民に特別な資格を認めることを規定した文書」と定義し、コミュニケーション文書、コンシュラ文書との共通の性格を確認したうえで、一一世紀までは主としてブルル、ヴィル・ヌーヴ、ソーヴテなどの農村的集落においてフランシーズが知られること、一二世紀以降コミュニケーション運動が最初の停滞期に入っ

た後、新たに都市から農村へとフランシーズ

ズ文書が普及したことを、王国内の地域ごとの多様性をふまえて明らかにしている。同文書の有無をも含めた、このような「解放」の実態の地域差は、各地域の領主制的構造と深くかわかる。このかわりにおいてこそ、都市と農村の「自由」は共通の考察枠組に入ってくるのである。

V R・キースリング(田北訳)「中世後期における都市と農村関係」は、このテーマに関する、都市の領域形成、人口移動、多様な経済関係、教会・修道院、学校、行政などの広範な論点を網羅した一九七六年までのドイツの研究動向の批判的紹介である。この中でとくに、都市の中心地機能に関する近業の入念な検討と、そこで示された、都市地理学、社会地理学の方法の中世史への無媒介な使用に対する批判(中世における経済外的領主制的、行政的構造の規定的作用)、そして、都市と市民の農村における土地所有の中に社会的、領主制的、経済的諸局面を結合させる都市・農村関係の核心がある、との指摘は印象的である。すぐれた研究史整理はおのずと、今後の研究の進むべき方向を示しているようである。

VI H・ファン・デル・ウェー(藤井訳)

「中世後期—アンシャンレジーム末期—ネーデルラントの工業成長」は、一七一—一八世紀ヨーロッパのプロト工業化の要因を、都市工業の生産コストの上昇にともなう、輸出工業生産の、賃金の低い農村への移動に求めるメンデルス、ド・フリース説を、ネーデルラントについて批判的に検討し、低廉な毛織物生産は既に中世後期に都市から農村へ移動しつつあったこと、にもかかわらずそれは都市工業の衰退に直結しなかつたこと、都市工業の衰退はむしろ、消費嗜好慣習の変化や、国民国家の重商主義政策に原因があることを明らかにしている。かくして一七世紀以降、都市・農村関係は近代国家という強力な包括的枠組の中で新たな局面に移ってゆく。

以上、本書所収の各論文は、一部、その選択に疑問がもたれるものの、各々の国の代表的研究者の、都市・農村関係に関する必読文献であることに相違ない。西欧中世における都市・農村関係の研究テーマとしての重要性は、あらためて強調するまでもないだろう。この両者の相互関係のありかたこそ、西欧社会の発展を規定する最も重要な要素のひとつだったのであり、その多

様性はまた地域社会構造の差異を生み出してきたのである。読者は、このテーマに関して独、仏、ベルギーの各学界の視点、或いは重点の置きどころが異なることに容易に気づくだろう(編者のあとがき参照)。詳論の余裕はないが、それはある程度各地域の都市・農村関係の実態を反映しているとも言えよう。しかし、ドイツ学界において領主制的視点が強いとの編者の指摘が、都市・農村関係への領主権力による規定的作用のみを重視する傾向を意味するとすれば残念なことである。なぜなら現実には領主制の展開自体も、各地域の都市・農村関係のありかたと相互に影響し合っており、従って領主制、都市、農村の多様な相互関係の展開の中に中世社会の構造的特質を見い出すことが、重要な課題であることを、評者は本書を通じて一層強く認識したからである。

(四六判 二八五頁 一九八七年一月
九州大学出版会 三二〇〇円)
(服部良久 富山大学人文学部助教)